最大震度7の令和6年能登半島地震。阪神・淡路大震災でも大きな被害をもたらしたキラーパルスを観測。

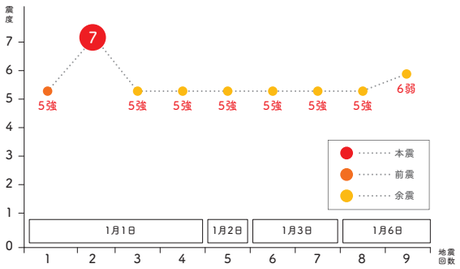
今回の地震では、珠洲市を中心に揺れの周期が1～2秒で、ゆさゆさと揺れて木造家屋に大きな被害をもたらすことで知られる地震波、キラーパルスが観測されています。阪神淡路大震災でも記録されたこの地震波が、木造家屋が多い地域の被害拡大につながったとみられていて、珠洲市では全壊2,099戸、半壊1,778戸。輪島市では全壊4,018戸、半壊4,763戸※と、キラーパルスを観測した地域では全壊半壊の件数が多くなりました。 ※2024年6月4日時点

令和6年能登半島地震での余震は、2024年1月1日の発生から6か月で約1,800回、震度5以上が19回（熊本地震も同頻度）

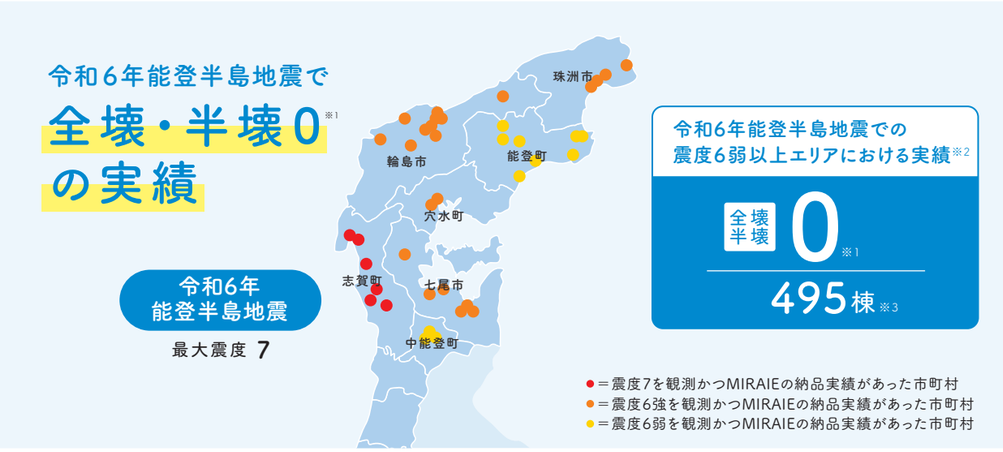
地震の規模を示すマグニチュードは7.6で、2016年の熊本地震や1995年の阪神淡路大震災（ともにM7.3）を上回る極めて大きい地震です。特に、今回の地震で大きな被害を受けた珠洲市では、2022年6月と2023年5月にもそれぞれ最大震度6弱と6強の地震が起きたばかりでした。

〈能登半島地震の余震回数〉

1月1日～6日の間での震度5以上の地震



出典元：気象庁 発表資料



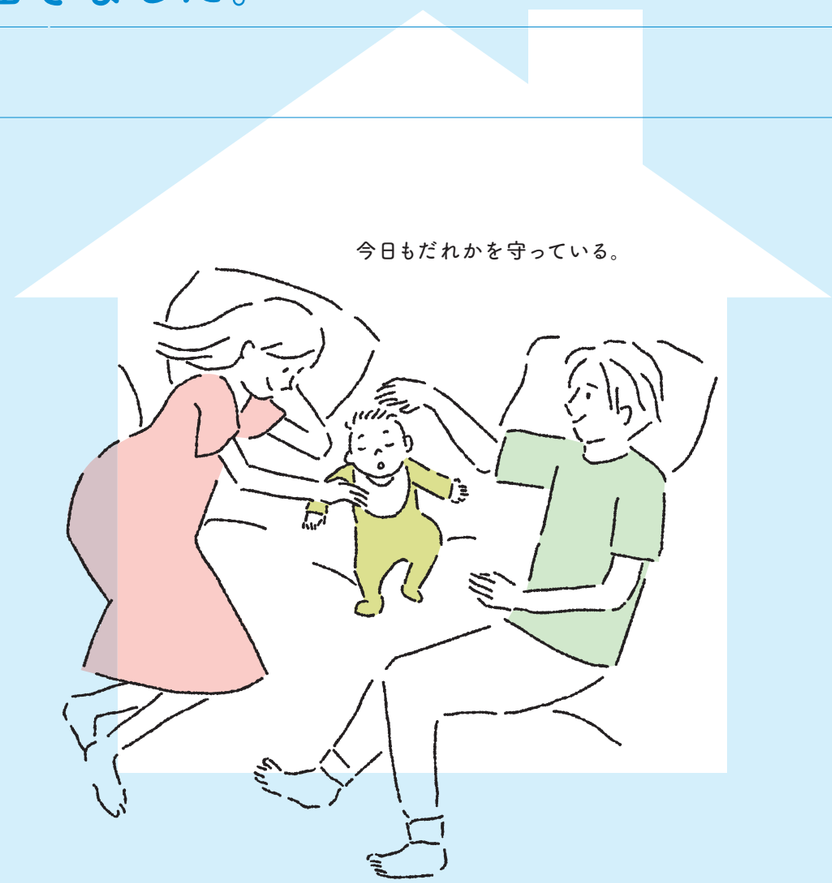
※1：当社の把握している範囲において
※2：令和6年能登半島地震において、震度6弱以上を観測した地点の所在する市町村における納品実績。
※3：地震発生日の前日までに納品した数量から算出した棟数であり、一部、設置・完成前の住宅が含まれています。

MIRAIEによって地震被害が減り、たくさんのご家族の未来が守られることを願っています。

※MIRAIEは住友ゴム工業株式会社の登録商標です。 2022年X月発行 XX・XX・XX○XX

ゴムの先へ。はずむ未来へ。
住友ゴム工業株式会社

能登半島から「MIRAIEがあってよかった」という声、届きました。



ゴムで揺れを吸収する制震ユニット「ミライエ」

MIRAIE®

全壊・半壊0（ゼロ）※。令和6年 能登半島地震からMIRAIEは人と住まいを守りました。

※令和6年能登半島地震における、当社の把握している範囲において

生後三週間の命を守ってくれたMIRAIE。損壊が激しいエリアで、自分の家がまっすぐ立っている状況は奇跡に近いと思った。

輪島市　山下さんファミリー

2022年12月に新築されたお住まいでご夫婦と3人の子供たちと暮らす山下さんファミリー。
息子さんが生後3週間という産後間もない中での被災経験などを詳しくお話いただきました。

MIRAIE採用のきっかけ

家を建てる際に「隣接する珠洲方面での地震が頻発していたので、地震に強いハウスメーカーで建てたい」との想いがあったという奥さま。そんな時に先立って家を建てた妹ご夫婦にMIRAIE標準装備のハウスメーカーを紹介してもらい、商品の説明動画を見てここにしようと決めたのだそうです。

設計段階から検討を重ねて、MIRAIEの配置はリビング・和室・キッチン・廊下に決定されました。この4基のMIRAIEが山下さん宅を繰り返しの揺れから守りました。

MIRAIEは京都大学生存圏研究所
五十田 博教授との共同開発の成果です。
（共同開発時は、信州大学教授）

五十田 博 教授

輪島市では最大震度7。爆弾が落とされたような周囲の状況

地震が起きた時は、ご自宅で奥さまのご両親と過ごされていた山下さんご一家。奥さまは生後3週間の息子さんに授乳をされていたそうで、「1回目の地震が来た時は、まだいつもの地震くらいの認識だったんですけど、2回目の震度7が来た時は、正直逃げようと思っても立てないレベル。そのまま前屈みでこの子を守って、座ってやり過ごすしかなかった。でも建物がミシッとなることはなく、倒壊する心配は全くなかった」といいます。家の外に出ると、この地域は特に損壊が激しいエリアだったため、周りの家屋や電柱はほぼなぎ倒され、「本当に爆弾を落とされたような状態」だったそう。そんな中「自分の家が何の損傷もなくまっすぐちゃんと立っている状況はちょっと奇跡に近いと思った」と奥さま。家族全員がその外観の状況に驚いたといいます。

山下さんのご自宅

長く暮らす家は、地震に強い家が1番

冬だったこともあり、電気が通らない、水がないという状況で地震直後は近くにある自衛隊の駐屯地に避難し、その後は新生児がいるので特別に市役所の個室を借りて10日間ほど滞在したといいます。自宅に帰ってきてからも何回か余震があったものの、「そんなに恐怖を感じない。自分の中で絶対的な安心感のもと、この場所で過ごしている」と絶大な信頼をご自宅に寄せておられます。最後に「家を建てる際は、MIRAIEを採用することが後々の安心材料になると思います」とうれしい感想を聞かせてくれました。

さらに詳しい
インタビュー動画はこちら

震災後に両親たちと8人暮らし。避難所より安心できる場所に。

珠洲市　蓮池さんファミリー

珠洲市にお住まいの蓮池さんはお子様3人のいる5人家族。
震度6強を観測し、自宅周辺が北東に50cm位ずれるほどの被害に遭いましたが、MIRAIEが家族と暮らしを守ってくれたといいます。

MIRAIE採用のきっかけ

10年ほど前に実家のある穴水で大きな地震を体験したご主人。さらに近年、珠洲市では震度2〜3の地震も頻発していたため、地震に強い家づくりをと、MIRAIEが標準装備されたハウスメーカーの展示会で実物を見て現在のお住まいに決められたそうです。それまで家の間取りや内装ばかりに目が行っていた奥さまも、ご主人の家づくりに対するこだわりに「しっかりと安心のことまで考えているんだな」と感心したそうです。

建設中に「MIRAIE」と記念撮影

1月1日、震度6強を観測した珠洲市

元日ということもあり、ご主人の実家がある穴水で被災した蓮池さんご一家。余震の心配からその日は車中泊をして翌日珠洲市のご自宅に戻られたそうです。「近所まで来ると倒壊した家屋が多く、道もそれらで塞がれているため、自宅まで車で行けず歩いてなんとかたどり着いた」とご主人。それほど珠洲市を襲った震度6強の被害は甚大だったといいます。自宅までの道中「いっぱい家が倒壊していて自宅の被害がすごく心配だった」と奥さま。ですが家がしっかりと建っていたことに胸を撫で下ろしたそうです。

家族も、暮らしも、MIRAIEに守ってもらった

地震直後の避難所は廊下に人が溢れるような状態だったよう。「私の両親や祖母は廊下で座ったまま寝泊まりしていて、子供たちにものびのび過ごしてほしいという理由で、8人で避難所代わりに自宅で過ごした」と奥さま。ご両親も「ここなら周りの人を気にしなくていいし、足を伸ばして眠れるからすごく良い」、「この家なら一番大きい地震（震度6強）にも耐えたし、避難所よりここにいた方が安心だ」とおっしゃられていたそうです。

子供たちが心から安心して眠れる家がある幸せ。

能登町　田中さんファミリー

漁師として一家5人を支える大黒柱のご主人。
地震対策に強いこだわりがなかったもののMIRAIEが標準装備されたお住まいを建て、今回その力を実感。改めてご自宅への想いをお伺いしました。

鉄筋コンクリート造の実家でさえ半壊以上の地震

地震当日、田中さんご一家は近くにある奥さまのご実家でお正月を過ごされていたといいます。約1年前の2023年5月に起きた震度5強の地震とは別格だと言うほどのとてつもない揺れだったそうで、「家が潰れる！ この子たちをどうしよう!?」ということだけで頭がいっぱいになったといいます。幸いご家族に大きな怪我はなかったものの、ご実家は鉄筋コンクリート造でしたが半壊以上で住めない状況に。「これでは自宅の方もダメかな」と思いながら戻ってくると外観は全く変わりなく、家の中も出た時のままくらいの印象だったそうで、奥さまとほっとひと安心したそうです。

子供たちも避難先だと気が張っていたよう

地震から1週間ほどでご自宅に戻ってきたという田中さんご一家。中でも一番驚いたのは、帰るなり4歳と2歳の子供たちがすぐ寝たことだといいます。「いつもだったら布団じゃないと寝られないのに1階のリビングで大の字になって寝てしまった。もう何も考えずにすぐ」そこから朝まで起きなかった姿を見て、「1週間ずっとピリピリした中で子供ってやっぱり安心感のある場所だと寝てしまうんだな」と感じたそう。奥さま共々「子供たちが安心して眠れる家があって良かった」としみじみ思われたようです。

MIRAIEを標準採用で義務付けてほしい！

2020年に立派なマイホームをお建てになったご主人。その当時、地震への意識はそこまでなく、「結果的にMIRAIEが標準装備されていたというのが正直なところ」といいます。MIRAIEの能力自体もどこか半信半疑なところがあったみたいですが、今回の地震でMIRAIEのすごさを心底実感したそう。「もうMIRAIEをどのハウスメーカーさんも標準装備して、誰もが地震の心配をしなくていいくらい当たり前に搭載されているものになってほしい」とその想いを熱く語ってくれました。

※本ページのインタビュー内容は2024年7月時点の情報に基づきます。